



鈴木均さんの遺言で長野県内の八ヶ岳山麓で営まれた葬儀で、お経をあげる高橋和尚。壁一面の本棚には、均さんの愛した書籍で埋め尽くされていた＝2018年5月9日、萩尾信也撮影

## ◆オーダーメイドが身上の「革命僧」

### 遺骨収集の旅、転機

「僕が寺を去る直前のタイミングを計ったように、均（ひとし）は僕に住職としての最後の勤めを置き土産にして逝った」

長野県松本市の臨済宗「神宮寺」で、千葉県市川市在住の鈴木均さん（46）の訃報に接した高橋卓志（たくし）和尚（69）の思いである。着電は5月6日の夜。客員教授を務める京都の龍谷大での講義を翌日に控えた和尚が、教材を詰め込んだカバンを枕元に置いて就寝したばかりだった。

30分後、和尚は高速道路を走るタクシーの車中にいた。走行距離253キロ。翌7日未明に鈴木家にたどり着くと、介護ベッドの上でパジャマ姿の均さんが横たわっていた。「夫婦で添い寝をして、最期は私の腕の中で息を引き取りました」。妻の久美子さん（48）が穏やかな口調で教えてくれた。

和尚は、均さんの母ふじ子さん（69）と2人で、パジャマから均さんが愛用していた作務衣（さむえ）に着替えさせた。葬儀の打ち合わせをして、仮眠もとらずに京都に向かう。そして、和尚からの電話を受けた私は東京駅で合流して、午前7時過ぎの新幹線に同乗した。

この日、大学に着いた和尚は「自殺と安楽死」をテーマに午前と午後の講義をこなした。休み時間には、スマホを手ひつぎの搬送や火葬の手続きを業者に手配。耳をそばだてる僧侶のタマゴたちに語りかけた。「これが僕が続けてきたオーダーメイドの葬式のやり方です。一人一人の人生が違うように、葬儀のあり方も違って当たり前なんだよ」

授業が終わると、和尚は電車で松本に舞い戻り、休む間もなく翌8日の均さんの通夜の準備作業を始めた。

和尚と私の縁を結んでくれたのは、宗教記者として鳴らした先輩の佐藤健さん（享年60）だった。末期がんを宣言された健さんは「生涯一記者を全うする」と決めて、入院先の東京都内の東大付属病院の緩和ケア病棟で「生きる者の記録」という題で闘病記を新聞に連載。執筆を手伝っていた私に、見舞いに来た和尚を紹介してくれた。

以来、交流を重ね、4年前には欧州の安楽死を視察する旅に同行。今年の正月明けには、和尚と一緒に都内のがん研有明病院に入院中の均さんを訪ね、「八ヶ岳の山荘で家族と本に囲まれて旅立ちたい」との遺言を傍らで聞いた。

神宮寺の住職の長男として生まれた高橋和尚は、龍大卒業後に修行して1975年に寺に入った。「誰が亡くなっても、型通りの葬儀をあげるだけの坊主だった」と言う和尚が覚醒する体験をしたのは3年後。京都にある花園大の学長を務めた臨済宗の山田無文老師に誘われて出かけた、ニューギニア島北西のピアク島での遺骨収集の旅だった。

飛行機を乗り継いで丸2日。小高い山にある巨大な洞窟にたどり着き、足首まで泥水につかりながら水中に手を入れると、日本兵の骨が累々と沈んでいた。先の大戦で洞窟に追い込まれ、米兵にガソリンのドラム缶を投げ込まれて焼死した1000人余の日本兵の末路だった。

「阿鼻叫喚（あびきょうかん）の最期を想像して体の震えが止まらなくなった僕が老師に促されて読経を始めると、慰霊団に参加した女性が水面をたたきながら号泣した。ご主人が出征した時、彼女のおなかには命が宿っていた。絶句して声が出なくなった僕が、『お前はそれでも宗教者のほしくれか！』と天の声に一喝されたような衝撃を受けたのはその時でした。僧侶はいかに生きるべきか？ 死者をいかに弔うべきか？ 南の島で授かった二つの問いかけは今でも続けています」



鈴木均さんが入院していた東京都江東区のがん研有明病院の緩和治療病棟で、旅立ち後の葬儀の打ち合わせ。右から順に母ふじ子さん、均さん、妻久美子さん、高橋和尚＝2018年1月8日撮影（家族提供）

「24時間営業のコンビニ寺」を自称して、「オーダーメイドの葬儀」を始めたのはそれから。訃報が届くと、夜半過ぎでも駆けつけて枕経をあげた。アルバムをめくりながら遺族の語る故人の足跡に思いをさせ、遺影の写真や葬儀で流す思い出の曲は皆で選んだ。

その数、600件以上。元ヤンキーの青年の葬儀で青年が好きだったロックバンドのスピッツの曲を流すと、突然、ヤンキー時代の仲間たちが歌い出し、葬儀は同窓会のような趣となった。

酒が大好きで、お昼に近所の店でそばをさかなに一杯やるのが日課だったおじいさんの葬儀で流した曲は、吉幾三の「酒よ」。94歳の理髪店主の葬儀は、斎場に床屋の椅子を持ち込み、その椅子に座って引導を渡した。

お経や葬儀の意味を子供たちにも分かる言葉で伝えることを心がけた。

六文銭を描いた紙をおじいちゃんに託す時は、ひつぎの周りに子供たちを集めて、こう言った。「あの世に行く途中に関所があって、通行料がいるみたいでね。だったら、おじいちゃんにもお金を持たせないとね。そうだ！ 今までで一番お小遣いをもらった子に入れてもらおう」

途端に歓声を上げて一人の少年を指さす子供たち。その姿に大人もつられて笑った。「死は忌み嫌うものではなく、遺体はけがらわしいものでないことを、子供たちに感じてほしい」。そんな和尚の思いがあった。

今月8日に八ヶ岳山麓で営まれた均さんの通夜と翌9日の葬儀にも、積み上げてきたエッセンスが詰まっていた。

和尚自ら祭壇を飾る花や葬儀の道具を車に積み込み、ハンドルを握って1時間。山荘に着くと、均さんの家族や親族と手を携えて祭壇をこしらえた。主役兼プロデューサーは均さんで、高橋和尚が現場ディレクター。2人が一体となって、参列者の思いを引き出しながらぬくもりに満ちた空間を紡ぎ出した。

お葬式では、和尚が子供たちの顔を見ながら、お経や「引導を渡す儀式」の意味をかみ砕いて語りかけた。和尚が付けた戒名は「貝葉院本覚地跡居士」。貝や葉っぱが紙の代わりに使われた故事にちなんで、本を愛し、司書を天職とした均さんにささげた戒名の由来に、参列した全員が大きくうなずいていた。

出棺や火葬場で茶毘（だび）に付す時には、涙する姿もあったが、誰もが「心に残る葬儀でした」と感謝の言葉を口にした。遺体搬送と火葬以外は全て手作り。日ごろから葬儀社頼りを極力抑え、寺のスタッフを動員して多様な別れの式を営んできたからこそできる葬儀だった。

## 寺の脱世襲へ決意

和尚が、寺を去るに至る長い道のりも記しておきたい。



遺族の思いをくんだ弔いを続ける中で、和尚のまなざしは災害や事故の現場や、市井の人々の生老病死の営みに向かっていった。86年のチェルノブイリ原発事故の5年後には現地に入り、信州大医学部と協働して6年間にわたって医療支援を続けた。

記者が同行したタイ北部の町で、高橋和尚（右から2人目）が設立したHIV感染者自立支援の縫製所で働く女性たちとの思い出の一枚。右端は現地パートナーの高僧＝2018年1月11日、萩尾信也撮影

95年の阪神大震災では支援物資を車で運び、2011年の東日本大震災では発生3日後に現地入りして一介のボランティアとして活動した。

「弔いで大切なのは、堅苦しい葬儀や仰々しい坊さんの衣や袈裟（けさ）ではない」

そう確信したのは、大津波から13日後の福島県南相馬市の遺体安置所でのことだった。

津波で亡くなった父親と対面を果たして火葬に向かうという男性から突然、「高橋さんはお坊さんなんですね。火葬の前にお経をあげてくれませんか」と声を掛けられた。聞けば、母親と妻は行方不明で、火葬に立ち会うのは彼一人。汗まみれの作務衣姿の和尚が、ひつぎが並ぶ体育館でお経をあげ、居合わせた10人ほどの警察官が亡きがらを運び出し、一列に整列、敬礼して見送った。

「位牌（いはい）も遺影もなく、会葬者もなく、宗派にもとらわれない質素な葬儀でしたが、そこには死者への敬意が満ちていました」。和尚の述懐だ。

寺の門戸を積極的に地域に開放し、社会とのつながりを強くした。

寺を出立する前に、ホールの窓から満面の笑みをのぞかせた 高橋和尚。心中を映すように窓ガラスに青空が広がっていた＝2018年5月10日、萩尾信也撮影

97年には、いのちの学び場として「尋常浅間学校」を開校して一般公開。親交のあった永六輔さんを校長に、10年間で100回の講座を続け、延べ4万3000人が聴講した。小沢昭一、灰谷健次郎、立松和平、小田実（まこと）、谷川俊太郎……。講師にきら星の人材が名を連ねた。

高齢化や介護の問題にも果敢に取り組んでいった。03年には廃業した温泉旅館を活用して通所の老人介護施設「ケアタウン浅間温泉」を開所。「御殿の湯」と名付けた温泉と地元の食材を使った昼食が人気を呼び、希望者が順番待ちの盛況となった。

仏教界に波紋を呼んだのは、91年に寺の経理や葬儀の明細を全て公開したことと、寺の世襲化の批判を始めてからだ。

「宗教法人というぬるま湯につかって、戒名やお布施を言い値で仕切る坊主まで現れた。寺は家業化していった。だから、僕は2人の息子に『跡を継がせる気はない』と伝えました」

当然、仏教界から反発の声が上がった。「パフォーマンスに走るな」「お前も2世坊主じゃないか」「檀信徒（だんしんと）が多いから言えるんだ」。それでも、和尚の信念は揺らがなかった。

そして、世襲をせずに、自ら寺を出る決意を固めていった。

寺を去る10日。和尚はいつものように午前4時に起床して、本堂でお経をあげ、5時の鐘を突いた。

「40年あまりにわたる寺勤めはこれでおしまい。これからは寺や宗派にとらわれず、ちまたで四苦八苦しなから暮らしている人々のために、僕ができることをやっていきたい」。最後の朝の勤めを終えた和尚が、コーヒーカップを手に私に残した言葉である。

出立は、境内の紅白のツツジと青空が彩りを添える昼下がりだった。「明日の朝目覚めたら別世界。夢のような生活が始まる」。満面の笑みを浮かべて妻正子さん（67）と愛犬平治とともに山門を出て行くレンタカーの後ろ姿を見送りながら、私は得心した。

かつてシッタータが世間を隔てていた城壁の四つの門を出て、人々の苦悩に触れて仏陀（ぶつだ）への道を歩き始めた物語のように、和尚は寺の山門を出て行くのだと。

後日談を二つ。

千葉の鈴木家では、12日に初七日を兼ねて母子で均さんが働いていた図書館を訪ねている。妻久美子さんの手には、均さんが生前に残した声のメッセージを録音したスマホがあった。

くママ、愛してるよ。あとは全て大丈夫だよ。子供たちをちゃんとして大事に育ててくださいね。やがてミニパパがちゃんとしたパパになるかもしれないからね。あやちゃんと、ともちゃんと仲良



<楽しくね。図書館にいけば私はいるからね。いつもいるからね>

「パパは心の中に生きている」。長女の文さん（11）と長男の友君（7）に芽吹いた思いである。

片や、新居の片付けを終えた高橋和尚は、22日にタイに飛んだ。同国でエイズウイルス（HIV）感染者やエイズ患者の問題が深刻だった00年に、当事者の女性の自立生活支援のために草木染めの手織りの作務衣縫製所を始動させて、はや18年。新薬の登場でエイズの発症は抑制されたが、物価上昇や草木染め職人の減少、高齢化する将来を見据えての対策など問題が山積していた。

「10日ほどしていったん帰国し、龍大の前期講座が終わる夏からはアパートを現地で借りて、チェンマイの大学でタイ語を学びながら新たな生き方に挑戦するつもりです」。出発を前に電話すると、和尚の弾んだ声が返ってきた。

民心の寺離れが続き、自動鐘突き機や卒塔婆プリンターまで登場。ついにはネットに「派遣お坊さん」や格安の葬儀案内が登場して、うろたえて見えるこの仏教界に「異議あり！」。

仏道探究の旅は続く。

---

#### ◆今回のストーリーの取材は

萩尾信也（はぎおしんや）（東京社会部専門編集委員）



長野県松本市の神宮寺で、高橋家の愛犬平次と遊ぶ萩尾記者

1980年入社。バンコク支局員、外信部副部長などを経て現職。  
2002～03年の連載企画「生きる者の記録」で早稲田ジャーナリズム大賞、  
11～12年の東日本大震災の長期連載「三陸物語」で日本記者クラブ賞。  
今回は写真も担当した。